様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月１７日現在

機関番号：３４３０２
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０６３６

研究課題名（和文）　小中連携による教育力を生かしたコミュニケーション能力養成のための評価に関する研究

研究課題名（英文）　An empirical study on evaluation of communicative competence through integration of elementary school and junior high school English education

研究代表者
齋藤　榮二（SAITO EIJI）
京都外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：60162187

研究成果の概要（和文）：本研究では、コミュニケーション能力養成とともに自己調整学習能力育成を目指した独自の小学校外国語活動のカリキュラムを開発し、実践・評価・改良を繰り返した。これらの取組から、参加者の自己調整学習能力は自然に育つものではなく、その育成には学級担任の関わりが大きく影響を与えることが判明した。また、研究最終年度には、それまでの２年間の研究に継続的に参加し中学校１年生になった参加者を対象に、上記小学校外国語活動において実践された自己調整学習能力育成に関する研究と同じ研究を実施した。その結果、参加者は自己調整学習能力向上に向けて努力できることが実証された。

研究成果の概要（英文）：This study aims to focus on developing an innovative teaching methodology for fostering self-regulated learning (SRL) behavior, as well as foreign language communicative competence, of 5th and 6th elementary school children and first-year junior high school students. Based on the findings of pre- and post-questionnaires for the elementary school children and homeroom teachers, and interviews with the teachers, it was concluded that homeroom teachers' intervention greatly influence the elementary school children's SRL behavior. The findings of pre- and post-questionnaires for the junior high school students, it was revealed that the methodology encouraged the students to engage in SRL.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	2,100,000	630,000	2,730,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：自己調整学習能力育成・小学校外国語活動・カリキュラム開発・小中連携

１．研究開始当初の背景

小学校外国語活動における評価規準例が『英語ノート』の指導資料に記載されているが、体系化された評価観点・評価規準・評価方法の提示はない。また、文部科学省の研究開発学校制度により指定を受けた小中連携をテーマとした研究は散見されるが、小学校外国語活動と中学校外国語教育を有機的に結合させる評価観点・評価規準・評価方法及び評価観点・評価規準・評価方法と一体化し

たカリキュラムの公開には至っていないのが現状である。さらに、文部科学省から、小学校外国語活動と中学校外国語教育を有機的に結合する評価観点・評価規準・評価方法及び評価観点・評価規準・評価方法と一体化したカリキュラムは開示されていない。

２．研究の目的

本研究の目的は、コミュニケーション能力養成とともに自己調整学習能力育成を目指した独自の小学校外国語活動のカリキュラムを開発し、検証授業に参加した小学生及びその小学生が中学１年生を参加者として，開発したカリキュラムが自己調整学習能力育成に貢献したかを検証することである。

３．研究の方法

本研究では、研究協力者と連携して、今後、外国語（英語）が教科化される可能性も見据えた、新しい小学校英語教育の在り方を求めて、その目標に自己調整学習能力育成を加えた新たなカリキュラムを開発し、その実践を行う３年間の研究を実施した。以下にその概要を記す。

＜平成２２年度＞
・ニーズ分析
・カリキュラム開発
・評価方法の設定と道具（ICT テスト含む）の開発
＜平成２３年度＞
・第１次検証授業
・検証授業の評価および改善
・第２次検証授業
・検証授業の評価および改善
＜平成２４年度＞
・第３次検証授業
・検証授業の評価および改善
・第４次検証授業
・検証授業の評価およびまとめ

(1)開発したカリキュラム

外国語活動の目標については、教科化を見据えたカリキュラム開発を目指し、現行の学習指導要領で掲げられている「コミュニケーション能力の素地を養成」から更に踏み込んだ目標として以下２つを設定した。
・コミュニケーション能力を養成
・自己調整学習能力の育成
また、コミュニケーション能力の構成要素を、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現・外国語理解の能力」、「言語や文化についての気づき・寛容な態度」の３つと明確化した。

(2)年間計画

実際に教科化となった場合、授業時間が現行と同様になるとは限らないが、開発したカリキュラムを、現行のカリキュラム内で実践する上で、授業時間を現行と同様の年間 35 時間とし、教材も『英語ノート１・２』を用いることとした。『英語ノート１・２』はそれぞれ９つの単元（Lesson 1～Lesson 9）から構成されており、それぞれの単元を４時間（Lesson１のみ３時間）かけて進めるよう設計されている。しかし、本研究では、言語能力の育成を目標に加えていることから、定着により時間をかけるために、内容面で関連する２つの Lesson で１つの Unit を構成し、各 Unit を８時間かけて進めるように設計した（図１参照）。

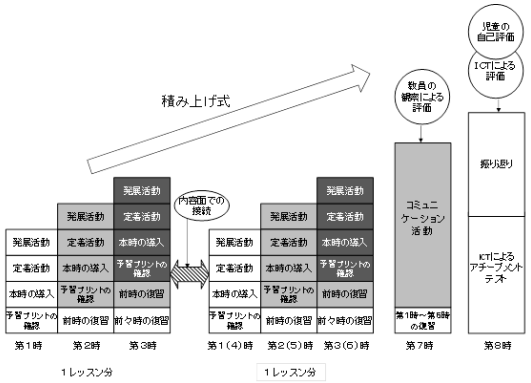

図１　ユニットモデル

(3)小学校外国語活動における自己調整学習能力育成の取組

＜平成２３年度＞

自己調整学習の過程には大きく「予見の段階」、「遂行コントロールの段階」、そして「自己省察の段階」の３つから形成される。「予見の段階」では、学習目標を設定し、それに適した学習方略を選択することが求められることから、自己調整学習の過程（サイクル）を上手く機能させるためには、まず学習者自身が「何ができて何ができないのか」を意識化する必要があると考えた。そこで、毎回の授業において『学習チェックシート』を用いて学習の振り返りを行うと共に、Unit の最期に客観的な評価（ICT によるアチーブメントテスト）と『振り返りプリント』を用いた自己評価（振り返り）を組み込んだ（図２参照）。

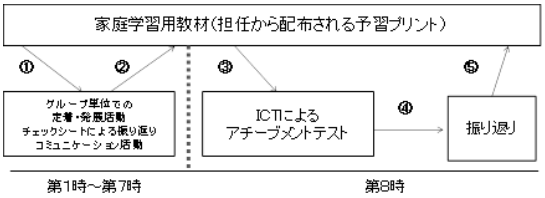

図２　自己調整学習能力育成を促す５つのステップ（平成 23 年度実施分）

①　『学習チェックシート』

毎回の授業終了時に行うため、時間をかけず授業の中で行った活動を再度確認するだけのものとした。

② 『振り返りプリント』

各 Unit で学習する２つの Lesson の到達目標（平均 15 項目程度）を４段階（４：よくできた、３：まあできた、２：あまりできなかった、１：全然できなかった）で児童に自己評価してもらう形式に加え、「わからなかったこと」「感想を書こう」「もっとどんなことを学習したいですか」という自由記述項目を３つ用意した。

③ 家庭学習用教材

自己調整学習過程における「予見の段階」の興味、および「遂行コントロールの段階」の注意の焦点化を促進させる道具の１つとして、『予習プリント』を作成した。どのプリントも、５分程度あればできる簡単なもので、次回の外国語活動での学習の導入や動機づけを目的としたものである。すべてのプリントは、『学習チェックシート』や『振り返りプリント』と共に、ファイル（ポートフォリオ）に入っているため、名称は『予習プリント』であるが、各授業や Unit 後に復習するように児童に促した。

これらの道具を用いながら、図２で示した５つのステップを児童に経験させることで、自己調整学習能力の育成を試みた。以上の取組の結果を以下に示す。

まず自己調整学習方略使用の実態について記す。参加者である児童が、実際に普段どのように自身の学習の調整を行っているかを調査するため、藤田・岩田(2002)が小学校６年生を対象に開発した「自己調整学習方略尺度」を用いて、和歌山県内の白浜第一小学校と白浜第二小学校に在籍する児童の自己調整学習方略使用状況を調査した。本尺度は２２項目からなり、各方略使用を、「いつも（３点)」「時々（２点)」「していない（１点)」の３件法で回答を求めるものである。

自己調整学習方略は、１）Help-Seeking 方略、２）モニタリング方略、３）努力調整方略、４）プランニング方略、５）負担軽減・回避方略の５つに分類される。図３は、両校の調査結果を１）～５）の分類別に比較したものである。モニタリング方略、努力調整方略、負担軽減・回避方略については学校・学年間で差がほとんど見られなかったが、Help-Seeking 方略及びプランニング方略の使用において差が確認できた。後の研究協議会での話し合いにおいて、この差を生み出した要因が、クラスサイズに起因していることが判明した。つまり、白浜第二小学校は、１クラスの人数が非常に少ないことから、担任の教員が一人一人の児童に注意を向けやすく、また、手をかけやすい環境が逆に児童の自己調整を妨げる要因となった。自己調整学習を促すためには、少しずつ教師の足場掛けを外していく工夫が求められる。

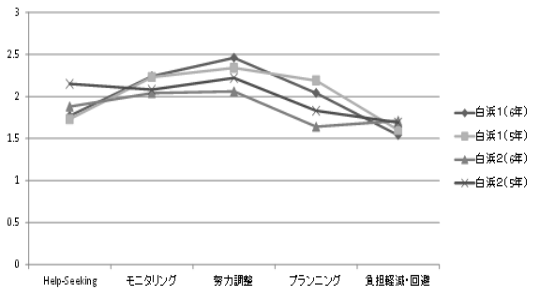

図３　自己調整学習方略使用の学校・学年別比較

次に、自己調整学習方略使用と振り返りの関係についてである。前述した自己調整学習方略使用調査の学年別結果を Mann-Whiteny の U検定により分析したところ、２校間において６年生のみに有意差（p < .01）が認められた。そこで自己調整学習方略尺度において有意差が確認された６年生の『振り返りプリント』における自由記述データ（合計８回分）を分析した結果、２群間（自己調整学習方略使用の多い白浜第一小学校と使用の少ない白浜第二小学校）において自由記述データ量に大きな差異が確認された（表１参照)。

表１　６年生の振り返りにおける自由記述量比較

	白浜第一小学校（n=37）					
	わからなかったこと		感想		もっと勉強したいこと	
	平均記述量	記述なし	平均記述量	記述なし	平均記述量	記述なし
Unit 1_Lesson 1	12.91	5 (13.5%)	20.09	0 (0%)	12.23	3 (8.1%)
Unit 1_Lesson 2	11.43	5 (13.5%)	19.94	0 (0%)	12.63	0 (0%)
Unit 2_Lesson 4	16.09	1(2.7%)	21.56	0 (0%)	14.15	1(2.7%)
Unit 2_Lesson 5	13.88	0 (0%)	18.32	0 (0%)	14.53	0 (0%)
Unit 3_Lesson 6	18.97	1(2.7%)	18.89	0 (0%)	13.56	0 (0%)
Unit 3_Lesson 7	14.11	1(2.7%)	15.89	0 (0%)	12.36	0 (0%)
Unit 4_Lesson 8	11.10	0 (0%)	15.68	3 (8.1%)	11.29	0 (0%)
Unit 4_Lesson 9	10.22	0 (0%)	14.16	0 (0%)	11.47	0 (0%)
	13.59		18.06		12.78	
	白浜第二小学校（n=14）					
	わからなかったこと		感想		もっと勉強したいこと	
	平均記述量	記述なし	平均記述量	記述なし	平均記述量	記述なし
Unit 1_Lesson 1	6.69	3 (23.1%)	15.54	2 (15.4%)	12.92	2 (15.4%)
Unit 1_Lesson 2	2.31	7 (53.8%)	6.08	5 (38.5%)	4.77	5 (38.5%)
Unit 2_Lesson 4	—	—	—	—	—	—
Unit 2_Lesson 5	6.42	5 (38.5%)	18.50	0 (0%)	4.00	8 (61.5%)
Unit 3_Lesson 6	1.23	8 (61.5%)	16.54	0 (0%)	9.85	3 (23.1%)
Unit 3_Lesson 7	0.92	8 (61.5%)	17.23	0 (0%)	12.62	2 (15.4%)
Unit 4_Lesson 8	6.69	7 (53.8%)	16.46	1 (7.7%)	12.46	4 (30.8%)
Unit 4_Lesson 9	3.08	9 (69.2%)	16.54	1 (7.7%)	14.46	3 (23.1%)
	3.91		15.27		10.15	

また、自由記述データを質的に分析した結果、白浜第一小学校の参加者は、白浜第二小学校の参加者と比べ、より具体的な記述が散見され、さらなる学習への動機づけや目標設定につながる要素が多く含まれていたことが判明した。

この結果から、児童の自己調整学習方略使用と振り返りにおける自由記述の量と質には関連があることが判明した。また、合計８回に及ぶ振り返りを実施する間、記述量は一定せず、回を重ねるごとの量や質の向上は確

認できなかった。つまり、ただ振り返りを継続的に実施するだけでは、自己評価能力や自己調整学習能力の育成は困難であること、また、せっかく振り返りによって気づいた点や、向上した学習意欲を、次の学習へつなげ、自己調整学習過程（サイクル）をうまく機能させるためには、「予見の段階」へうまく導く工夫が必要であることが明らかになった。
一方、授業担当者たちの報告によると、振り返りをすることで、児童が出来たと感じているところ、また苦手と感じているところが明らかになるため、次の授業の復習や活動にそれらを生かす工夫ができたとのことであった。授業者側の視点に立つと、振り返りが、児童のニーズ（学習意欲）を知る道具として非常に有効であることも判明した。

＜平成２４年度＞
平成２４年度の検証授業を行う上で、以下の改良を行った。
①　ユニットモデルの見直し
振り返りの時間を十分確保するために、平成２３年度には、１つの Unit を８時間かけて進めていたのを、９時間に変更し、第８時をアチーブメントテストのみとし、第９時にアチーブメントテストによる客観的な結果を児童に渡したのち、『振り返りプリント』による振り返りを実施することとした。
児童の中には、客観的に自身の学びを振り返る力がまだ身についていないものもいたため、特に弱点の把握が出来ていないケースが多かった。弱点の把握がなければ、次の学習の目標が立てられないことから、意識的に自身の学習を進めることが困難になってしまう。このため、アチーブメントテストの結果を、客観的に学習を振り返るための一助と位置付けた。
②　自己調整学習能力育成のための道具の見直し
平成２３年度の取組を通して、改めて「目標設定」の重要性を認識したことから、毎回の授業で、本授業の達成目標の確認と、自身の目標設定を組み込むこととした。また、平成２３年度では授業終了時に『学習チェックシート』を用いて、主にどんな活動をしたかを確認していただけであったが、学習の振り返りを自分のことばでまとめる訓練が必要であることから、「目標確認と設定」と「今日の授業の振り返り」を１枚のプリントにまとめた『学習チェックシート』を作成し、Unit の第１時～第６時までの毎回の授業で実施することとした。なお、第９時に実施する『振り返りプリント』の形式はそのままとし、平成２３年度と同様に実施することにした。
改良を加えた新しい取組を、１Unit（９時間）実施した後、授業担当者たちから、毎回の授業で「目標確認・設定」と「授業の振り返り」を実施するのは時間的に厳しいとの意見が出た。自己調整学習能力の育成の重要性を認識する一方で、できるだけ多くの英語に触れさせて、活動に参加させたいという思いもあり、授業者自身、ジレンマを感じている様子であった。実際、『学習チェックシート』の児童の記述を見ても、それが見て取れる内容であったため、急遽、以下のように変更を実施した。
・毎時の授業で、『学習チェックシート』を用いて目標確認と設定をする⇒Unit 内の各レッスンの第１時に『目標確認シート』を用いて、目標確認と設定をする
・毎時の授業で、『学習チェックシート』を用いて、学習の振り返りをする⇒毎時の授業で、『学習チェックシート』を用いて、学習の振り返りをする
以上のように、平成２４年度は主に「目標設定」と「振り返り」に焦点を当てた取組を実施した。そこで、その有効性を検証するため、第４次検証授業後の１月に、参加児童とそれぞれの授業担当者を対象に、アンケート調査を実施した。
児童対象アンケートは、目標設定と振り返りに関する２４項目からなり、前半１４項目を、「とてもそう思う（4 点)」、「まあそう思う（3 点)」、「あまりそう思わない（2 点)」、「そう思わない（1 点)」の４件法で回答を求めた。後半 10 項目は、行動に関する項目であったため、「いつもした（4 点)」、「ときどきした（3 点)」、「あまりしなかった（2 点)」、「全くしなかった（1 点)」の４件法で回答を求める形式とした。
教員対象アンケートでは、全１１項目の内、自由記述項目が７項目、多肢選択項目が４項目で、目標設定や振り返りに関する意見や、実際の授業でのエピソードや気づいた点などを問う形式とした。
以下、検証結果について記す。表２は、児童対象のアンケートの結果をまとめたものである。全体的に、児童たちは、学習活動に入る前に、学習目標を確認したり、また自分自身で設定したりすることを重要と認識している。また、認識だけにとどまらず、実際の学習活動の間、それらを意識していたこともこの結果からうかがえる。
振り返りにおいては、目標が達成できたらうれしいと感じ、逆に達成できなかった場合は、次に頑張ろうと感じる等、自己調整学習の３つの過程をある程度実行できていることが判明した。
非常に興味深いことに、 Mann-Whiteny の U 検定を用いて、５年生（n = 58）と６年生（n = 47）を比較したところ、項目３、６、７、１０、１１、１２、１４、１６、１７、１８、１９、２０、２１、２２において差が確認できた。特に行動に関して大きな差が生

まれていることから、自己調整学習能力と児童の発達段階の関連が考えられる。

表２　児童対象アンケート結果

		全体 (N=105)	
		Mean	SD
1	毎回の授業で、活動前に「今日の授業の目標」を確認することは良いことだ	3.35	0.71
2	今日の授業の目標が達成できるとうれしい	3.24	0.86
3	毎回の授業で、活動前に「あなた自身の目標」を設定することは良いことだ	3.27	0.82
4	「あなた自身の目標」を書くことは難しかった（何を書けばよいかわからなかった）	2.56	0.99
5	自分が立てた目標が達成できるとうれしい	3.34	0.84
6	「今日の授業の目標」や「あなた自身の目標」は、外国語活動をがんばるためのはげみになった	2.83	0.80
7	毎回の授業で、活動後に振り返りをすることは良いことだ	3.23	0.82
8	振り返りの時、「わかるようになった/できるようになったこと」を書くことは難しかった（何を書けばよいかわからなかった）	2.42	1.04
9	振り返りの時、「まだよくわからないこと/もっと練習が必要と感じること」を書くことは難しかった（何を書けばよいかわからなかった）	2.57	1.00
10	振り返りの時、「次に頑張ること」を宣言しておくことは良いことだ	3.30	0.83
11	前回の授業で「次に頑張る」と決めたことが、次の授業で達成できると、自分が成長していると感じられる	2.99	0.90
12	先生から、振り返りシートにコメントがもらえることはとてもうれしい	2.96	1.11
13	目標が達成できないと、落ち込んでしまう	1.68	0.84
14	目標が達成できないと、次にがんばろうと感じる	2.97	0.92

		全体 (N=105)	
		Mean	SD
15	「あなた自身の目標」を友だちと見せ合いっこした	2.30	1.16
16	友だちの書いている「あなた自身の目標」を参考にした	2.05	0.99
17	「今日の授業の目標」を達成するように意識しながら、外国語活動をやった	2.95	0.86
18	「あなた自身の目標」を達成するように意識しながら外国語活動をやった	2.94	0.88
19	目標が達成できなかった場合、次の授業でできるようにがんばった	2.85	0.98
20	目標が達成できなかった場合、先生やクラスの友だちにアドバイスを求めた	2.09	1.14
21	振り返りの結果をグループや友だちと見せ合いっこした	1.97	0.96
22	振り返りの時、「まだよくわからない/もっと練習が必要」と感じたところは、復習をやった	1.96	1.03
23	授業前に予習プリントをやった	2.91	1.06
24	外国語活動の授業外（学校や家）でも習った英語を使ってみた	2.39	1.03

また、教師の指導との関連を確認するために、各学年のクラス間で（５年生は白浜第一小学校の２クラスと白浜第二小学校の１クラスの合計３クラスを Kruskal-Wallis 検定を用いて、６年生は各校１クラスずつの合計２クラスを Mann-Whiteny の *U* 検定を用いて）比較したところ、多くの項目で差が確認できた（表３参照）。

表３　アンケート項目で差が確認できた項目（クラス間）差が確認できた項目

	差が確認できた項目
5年生3クラス	1、2、3、4、5、6、7、8、9、12、15、16、19、20、21、22、23、24
6年生2クラス	1、12、15、16、20、21、22、24

クラス間でこれだけの差を生み出したということは、教師の意識や指導の違いが児童の目標設定や振り返りの意識や行動に大きく影響する可能性を示している。実際、教員対象のアンケートでも、目標設定や振り返りに対する教師の意識や指導の差が数多く確認できた。

(4)小学校外国語活動における自己調整学習能力育成の取組

小学生に対する自己調整学習能力育成を促す５つのステップと連携した形で、中学生の自己調整学習能力育成を促す５つのステップを設定した（図３参照）

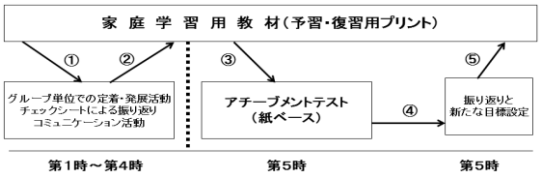

図３　自己調整学習能力育成を促す５つのステップ（中学校１年生用）

以下、検証授業で使用した道具について、小学生対象のモデルとの一貫性に配慮しつつ、以下を使用した。

・毎時の「振り返りプリント」
・単元ごとの「振り返りプリント」
・家庭学習用教材
・「アチーブメントテスト」

検証授業は、2 学期の１０月、１１月という期間にわたり、New Horizon 1 の Unit 7、Unit８という２つの単元で実施した。中学１年生２クラスのうち、１クラスを実験群、もう１クラスを統制群とした。

検証の結果、興味深いことに、実験群で行ったアンケート分析から、小中連携の成果と課題が明らかになった。小学校段階で行った自己調整学習に特化した指導が、中学校段階での指導とリンクしている面・していない面の双方が反映されていたのである。以下、詳細な分析結果を報告する。

まず、小学校段階で行った自己調整学習に特化した指導に関する回答分析である。「小学校で学習チェックシートがあったおかげで、毎時間の目標がわかった」と回答した生徒が 73.9%、「目標がわかることには意味がある」と回答した生徒が 78.3%と、図１における「予見の段階」に当たる「目標設定活動」に小学生段階から意義を見出していたことが判明した。また、「授業の振り返り」には意味があると回答した生徒が 87.0%であった一方で、「授業の振り返り」を毎回きちんと行っていた生徒は 60.9%、「小学校の時に、英語の自律学習の習慣がついた」生徒は 50.0%にとどまり、意識できる能力と実施できる能力は一致していないことが明らかになった。「小学校段階で、家庭学習の大切さに気づいた」生徒は 65.2%、「小学校段階で、自分で目標を決める大切さに気づいた」生徒は 72.7%、「小学校での学習習慣が、中学校で役に立っている」と回答した生徒は 81.8%と、小学校外国語活動における自己調整学習に焦点化した指導の有効性が示唆された。

次に、中学校段階で行っている自己調整学習に関する回答分析である。「中学校の勉強は難しいので、今の学習が足りていない」と回答した生徒が 77.3%にのぼり、自由記述でも、「中学校では、単語をたくさん覚えないといけない」といった小学校外国語活動と中学校英語授業の違いを痛感している記述が

目立った。小学校段階ではそれほど必要としなかった、自ら行う学習への意識が明らかに高くなっていることが見てとれる。「自律学習へのサポートを、中学校でも先生にしてほしい」と回答した生徒が過半数（54.5%）であったことから、必要性は認識していても、どのように家庭学習をすればよいかわからないという実態が見えてくる。逆に、中学校段階では、半数近くの学習者が「先生のサポートはいらない」と考えているという見方も可能である。小学校段階では教師の介入といった外的な要因が大きく影響するという検証結果と比較すると、自己調整学習能力と発達段階の関連性がより明白になった。

４．研究成果

本研究チームは、研究協力者と共に３年間にわたり、自己調整学習能力育成を目標に加えた外国語活動の実践・研究を行ってきた。本稿にまとめた取組からもわかるように、その過程は試行錯誤の連続であった。そして、まだ数多くの課題が山積している。自己調整学習という過程は、多くの要因が複雑に絡み合い、変化しつづけていくため、その過程の解明や能力の測定は非常に困難と言える。しかし、この３年間の大きな挑戦を通じて、我々全員は、外国語学習における自己調整学習の重要性を何度も認識する機会を持った。特に初期英語学習者段階に自律学習者の素地を育成しておくことこそが、今後世界で活躍できる人材を輩出する上で欠かせない。教育のパラダイムの転換が起こっている今だからこそ、更なる実践・研究が求められる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 齋藤榮二、近藤睦美、石川保茂、山本玲子、川端美和子、小学校外国語活動を通じた児童の自己調整（自律）学習能力育成について、和歌山県教育センター学びの丘平成２４年度研究紀要、招待論文、2013、73－85

② 山本玲子、齋藤榮二、近藤睦美、石川保茂、小学校外国語活動と中学校英語科教育の連携による自己調整学習能力育成の実証的研究、京都外国語大学・京都外国語短期大学研究論叢２０１３年LXXXI 号、査読有、2013、(印刷中)

〔学会発表〕（計３件）

① 川端美和子、齋藤榮二、近藤睦美、石川保茂、コミュニケーション能力と自律学習能力の育成を目指した授業デザインの実践、第１２回小学校英語教育学会（JES）千葉大会、２０１２年７月１５日～２０１２年７月１６日、千葉大学

② 近藤睦美、石川保茂、齋藤榮二、小学校外国語活動における児童の振り返りと自己調整学習方略の関係、第３８回全国英語教育学会愛知研究大会、２０１２年８月４日～２０１２年８月５日、愛知学院大学

③ 石川保茂、近藤睦美、齋藤榮二、小学校外国語活動におけるアチーブメントテスト用アプリケーション：英語音声認識を利用して、外国語教育メディア学会第５２回全国大会、２０１２年８月７日～２０１２年８月８日、愛知学院大学

〔図書〕（計２件）

① 齋藤榮二、近藤睦美、石川保茂、川端美和子、京都外国語大学国際言語平和研究所、新しい小学校外国語活動の在り方を求めて：第５学年編、2013、159

② 齋藤榮二、近藤睦美、石川保茂、川端美和子、京都外国語大学国際言語平和研究所、新しい小学校外国語活動の在り方を求めて：第６学年編、2013、147

〔その他〕

ホームページ等

小学校外国語活動を通じた児童の自己調整（自律）学習能力育成について

http://www.wakayama-edc.big-u.jp/es_gaikokugo/es_d.html

和歌山県教育センター学びの丘平成２４年度研究紀要

http://www.wakayama-edc.big-u.jp/kenkyukiyo24/kenkyukiyo_top.htm

６．研究組織

(1)研究代表者

齋藤　榮二（SAITO EIJI）

京都外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：60162187

(2)研究分担者

近藤　睦美（KONDO MUTSUMI）

帝塚山学院大学・リベラルアーツ学部・准教授

研究者番号：20467533

石川　保茂（ISHIKAWA YASUSHIGE）

京都外国語短期大学・キャリア英語科・教授

研究者番号：90257775

(3)連携研究者

山本　玲子（YAMAMOTO REIKO）

研究者番号：60637031

（H24 のみ）